



「パブルのころは、お客が減った。目新しいものに夢中だったから。最近はずいぶん古いものが見直されている」／撮影・近藤悦朗＝東京の全国伝統的工芸品センターで

漆器クリニック開いて18年・柴田 康時さん

人あり

塗り物はけた重箱、縁が欠けた
り中が変色したりしたお椀、取っ
手がとれた酒器……

一つずつ手にとって「大丈夫、
修理できます。漆は接着剤のよう
な役も果たすので、くっつけたり
埋めたり、塗り直したりできるの
です」。

東京・青山の全国伝統的工芸品
センターで、月一回の「漆器クリ
ニック」を開いて十八年になる。

毎回、三十人ほどから相談があ
り、修理を引き受けるのは約八
割。それを石川県・輪島の自分の
工房の職人たちの元へ送る。

持ち込まれるのは、ほとんどが
戦前のも。修理がきくとわかった
途端、「よかった。思い出の品な
んです」と声が上がります。

本業は、都内新宿区の輪島漆の
漆器を売る店の主である。一九
四七年、輪島で三代続く塗師屋の

次男に生まれた。慶応大商学部を
卒業後、地方銀行に就職し、三年
半東京支店に勤めた。

「たまたま長期休暇で帰郷した
時、一緒に酒を飲んでたおやじ
がボツリと『帰ってきてくれん
か』という。それもいいかなと思
い、家業を手伝いながら漆器の製
造や販売のシステムを勉強した。

七八年に独立し、店を持った」
伝統的工芸品センターは、七九
年に国や業界などが工芸品の普及
を目的に作ったが、柴田さんは開
股当初から縁が深い。漆器に時給
や沈金を施す教室を主宰するうち
に、修理の相談を受け、自然発生
的にクリニックが誕生した。

漆器は海外では「ジャパン」と
呼ばれ、日本を代表する工芸品兼
実用品だ。輪島漆は、黒や朱色の
漆を何度も塗り重ねるので堅くて
丈夫。高級料亭や旅館で使われる



修理を終えた漆器。塗り直しの
場合、半年かかり、お椀が2000
円、重箱が7000円

修理通じ思い共有

「修理が終わると社状が五通、十
通と届き、歸った思いを共有
する。漆器の命は長い。ある重箱
の持ち主は「昔、母が私の運動会
におにぎりを入れてくれた。娘の
運動会に間に合いました」。先祖
伝来の仏前用の膳を直してもらっ
た主婦は「やっと気持ち落ち着
きました」。

これまでに修理した漆器は八、
九万点に及ぶ。五十一歳になって
思うことがある。

「漆器は生き物。高価ではない
品でも長年大事に扱われて、品が
いい年の取り方をしたものがあ
る。一方、元は高級品なのに、い
じけた年寄りみたいなものも。私
も若い年を取りたいね」

(松原 照子)